

## 展覧会趣旨

1900年の第5回パリ万国博覧会(以下、万博)にて、並河靖之は、黒色釉薬の地色の花瓶に、桜と楓を大胆に配し、小鳥や花々を彩光ある七宝釉薬で鮮やかに画きだした《七宝四季花鳥図花瓶》で金賞を受賞しました。また、濤川惣助(1847～1910)の《七宝製墨画月夜深林図額》は、七宝釉薬で水墨画のような黒色の濃淡を表出し、大賞となりました。大いに評価された二つの傑作は、現在、皇居三の丸尚蔵館に所蔵され、明治の七宝業の秀逸さを今日に伝えています。

日本の品々は1851年のロンドン万博、1862年第2回ロンドン万博に、すでに展示され、幕末の1867年の第2回パリ万博には、幕府、薩摩藩、佐賀藩が参加をしましたが、限られた内容と規模に留まりました。そのため、明治維新後の1973年のウィーン万博は、明治政府による公式参加となり、新生する日本が世界に仲間入りする好機となりました。

奇しくも同年、靖之は七宝業をこの地で創業しました。靖之の生家は、武家の高岡家(近江栗太郡六地蔵梅野木)で、実父・九郎左衛門は武州川越城主松平大和守家臣・川越藩京都留守居役を勤めました。1855(安政2)年、数え11歳の時に、青蓮院門跡坊官の家柄である親戚の並河家の養子となり、養父・靖全の急逝により家督を継ぎ、天台座主・青蓮院宮入道尊融親王(1824～1891、後の久邇宮朝彦親王)に仕えました。維新後は宮家に復籍した朝彦親王の家従となりました。

しかし、時代の変革期にあたり、靖之には先行きへの不安が絶えずあり、奉職の傍ら、当時、注目され始めた七宝業に着手しました。1878(明治11)年に専業とし、次々と万博で受賞を果たし、世界に「並河七宝」の名を馳せ、多くの人々を京都の並河邸へと誘いました。

日本の七宝業の系譜は近世初期に遡り、幕府お抱えの七宝師・平田道仁(1591～1646)を祖とする一族が技法を相伝してきましたが、幕末の尾張藩で梶常吉(1803～1883)が独学で技法を開発し、尾張七宝の産地が形成され、庶民による七宝業が胎動しました。近代七宝業は、維新後に京都や東京、神奈川、山梨、埼玉でも着手された新興産業でした。

靖之による「並河七宝」の有線七宝技法は、金属の器胎を素地とし、施す図柄の輪郭線(アウトライン)を細い金属線で模り、その中にガラス質の多彩な七宝釉薬を挿し、焼成、研磨して創り出されます。精緻な図柄や七宝釉薬の艶のある豊富な色味には、高雅な雰囲気漂い、殊に地色を黒色にすると、それを一層とし、見る人の心を魅了しました。

秋季特別展 祝・靖之生誕 180年 「並河七宝 - 永遠なる黒の耀き」では、靖之の生誕を祝し、靖之と職工たちが創出した、並河七宝の黒色釉薬の軌跡と魅力の一端を紹介し、七宝業にて世界に挑んだ靖之と職工たちの真心に、是非ともふれてください。

当館でのひと時が、皆様にとって佳きものとなりましたら嬉しいのです。